

ベラルーシというソヴィエト連邦の一部だった東欧の小さな国について日本ではそれほど知られていない。本論ではベラルーシに大きな爪痕を残した 20 世紀の二つの出来事、独ソ戦争とチェルノブイリ原発事故を通して、ベラルーシ人らしさと一般に考えられている特徴がどのように形成されてきたのかを明らかにしたい。まず最初にはベラルーシにまつわる様々なイメージやステレオタイプを検討する。

名前の由来

ベラは「白い」を意味し、大ざっぱに見ればルーシはロシアの古称なので、ベラルーシは「白いロシア」と翻訳できる。実際、ソ連から独立する前は「白ロシア・ソビエト社会主義共和国」が正式な国名だった。これは日本語の問題だが、ベラルーシ人を「白ロシア人」と呼ぶと誤解を招く可能性がある。革命に反対して亡命した「白系ロシア人」と間違われやすいのだが、もちろん両者はまったくの別物である。それでも日本語は「白」か「白系」かで区別できるだけまだましな方で、英語の **White Russians** はベラルーシ人と亡命ロシア人のどちらの意味でも使われたのだから始末におえない。

ソ連が解体する直前の 1991 年 9 月に国名が「ベロルシア（白ロシア）」から「ベラルーシ」に変更されたのだが、実は前者がロシア語で後者がベラルーシ語なだけで、どちらの意味も同じ「白いロシア」なのである。ソ連時代でもベラルーシ語の国名は「ベラルーシ」に変わりはなかったのであり、正確には国名の変更というより使用言語の変更なのである。このように固有名詞を「翻訳」することはしばしば混乱を招くのであるが、ロシア語とベラルーシ語は近い言語だけに話がややこしくなりやすい。英語でもロシア語をもとにした **Belorussians** からベラルーシ語に由来する **Belarusians** という新語に移行しつつあるが、そのスペルが **Russians** と似ているのが嫌なのだろうか、**Belarusans** を使う人たちもいる¹。それではなぜ白いロシアなのだろうか。ベラルーシ人に尋ねてよく返ってくる答えは、伝統的な民族衣装が白い布地を基調としたものだからとか、白い色は自由を意味しており、ロシアとは違ってモンゴルに支配されなかったからなどというものである。これらは民間語源と言ってもよく、学問的な根拠を問うならばあやしい説明である。色彩で方位を表す東洋の空間概念（白虎・朱雀・青竜・玄武）がモンゴルのロシア支配を通じて伝えられたとする説もあり、それによればベラルーシは「西のロシア」を意味することになる。興味深いことに古い時代には「赤ルーシ」や「黒ルーシ」という地名が存在したことが知られ

¹ Jan Zaprudnik, *Belarus: At a Crossroad in History*, (Boulder, San Francisco, Oxford: Westview Press, 1993)

ており、色彩方位説にはそれなりの説得力がある²。

中世ヨーロッパでは「白い国」が東方にあると考えられていた。あるところでそれはラテン語で白い国を意味するアルバニアと結びつき、別なところではヨーロッパの東に広がるロシアという空間と結びついて「アルバルテニア」となった。ルテニアはラテン語でルーシを意味する。最近ベラルーシでアレシ・ベールイという文献学者がヨーロッパの古地図を丹念に調べ、白いルーシと呼ばれる場所が次々と移り変わっていることを示して話題になった³。それによると、北のノブゴロドが白ルーシとされたこともあったし、黒海沿岸地域がそう呼ばれることもあった。ルーシの地で覇権を奪うモスクワ大公がやがて「白いツァーリ」の呼称を得るのもこれと関連する。白いルーシの呼称が現在のベラルーシ領内に定着するのはせいぜい 17 世紀のころであるらしい。私の勝手な推論をここに加えるなら、古い信仰を守るロシアの旧教徒たちは当方の彼方に白水境（ベロヴォージェ）というユートピアを夢見てそれを日本と同化することがあった⁴。もしもロシアの白水境伝説にヨーロッパの「白い国」イメージの反映があるとすれば、空想の地理学の中でベラルーシと日本がつながるようで面白い。

話題が脇道に逸れてしまったが、けっきょくベラルーシという国名の起源にはこれといった明快な答えがあるわけではない。アジア起源の色彩方位説によれば「白いルーシ」は西の辺境を表すし、ヨーロッパの地理観念に従うならば「アルバルテニア」は東方の漠然とした空間を指した。東西のどちらの「中心」から見てもベラルーシは周縁的な場所であり、その名前も外部から一方的に与えられたものでしかない。民族衣装や自由な土地というもっと主体的に見える語源説明には学問的な裏付けがとぼしい。このような東と西の境界的な位置や自己アイデンティティの弱さは、今回のシリーズで取り上げられている東ヨーロッパに共通して見られる特徴でもある。ベラルーシの白い色はさまざまな意味を外部から吸い込む空虚を示しているかのようにも見える。

歴史と言語

歴史的をさかのぼってベラルーシという国の源流を求めることも実はむずかしい。ベラルーシの学校で用いられている歴史教科書を見ると、古都ポロツクが南のキエフ公国に征服されるという 10 世紀のエピソードから始まるものが多い。キエフ公ウラジミルに陵辱される公女ログネダの悲劇はベラルーシのパレーの演目として人気を博している。ポロツク公国を原初のベラルーシ国家と見なしてよいかどうかとも問題だが、それが滅ぼされるころ

² 伊東一郎「＜白ロシア＞の起源——地名・民族名称と色彩方位観」松原正毅編『人類学とは何か——言語・儀礼・象徴・歴史』日本放送出版協会、1989年。

³ Алесь Белы, Хроніка Бelay Русі, Мінск: Энцыклапедыкс, 2000; 服部倫卓『歴史の狭間のベラルーシ』東洋書店（ユーラシア・ブックレット）、2004年、32-35頁。

⁴ 中村喜和『聖なるユートピアを求めて：旧教徒のユートピア伝説』平凡社、1990年、103-140頁。

から歴史の記述が始まるのである。13世紀には北の隣人リトアニアがバルト海と黒海をつなぐ大国を築き、ベラルーシもその版図に含まれることになる。17世紀になるとリトアニアは「連合」というかたちで次第に西のポーランドに同化されるが、やがて18世紀末にはそのポーランドともども東のロシア帝国に併合されてしまう。このようにベラルーシの歴史は、周辺国家によって順繰りに支配されるという構図になっている。名目上とはいえベラルーシが国連に席を持つ国家の体裁を整えるのはソ連時代になってからなのである。ルカシェンコ大統領が推進しているロシアとの「連合国家」構想も場合によっては大国に呑まれ続けてきたベラルーシの歴史を繰り返す結果になるかもしれない。もちろんベラルーシだけが特別なわけではなく、東欧の小民族はみな大国の支配下で近代的な国民意識を育てたといえる。それらは過去に失われた栄光を「復活させる」というスローガンの下で行われるのが普通だったが、ベラルーシには復活させようにも国としての輝かしい歴史の素材に乏しいという悲劇があった。たとえばベラルーシ史家の間では、中世の東欧で覇を唱えたリトアニア大公国が実はスラブ系民族が支配層として優勢だったとされ、ベラルーシ国家のルーツとしてそれなりに説得力のある定説になっている。しかしリトアニアという国名自体はベラルーシ人ではなく隣のリトアニア人が継承している点でやはり分が悪い。歴史以上に深刻なのは言語の問題である。ベラルーシ人がベラルーシ人だというアイデンティティの拠り所として最も頼りにできるのは母語たるベラルーシ語のはずだった。しかしソ連時代の急速な都市化と相まって、ロシア語が日常生活の隅々まで浸透してベラルーシ語を駆逐してしまった。もともと両言語は互いに近い関係にあるため影響を受けやすかったともいえる。現在、都市部ではロシア語、地方や農村部では混成言語である「トランシヤンカ」が主流であり、純粋なベラルーシ語を日常的に用いているのは恐らく人口の数パーセントに過ぎない。旧ソ連の共和国ではどこでも同じような言語の問題はあったが、独立後はそれぞれの民族語に安定した地位が与えられており、ベラルーシのように国全体でさらなるロシア化が進行するケースは珍しいように思える⁵。

その点で象徴的だったのは2002年の日韓共催のサッカーワールドカップである。ベラルーシには自前のテレビ局もあるが、よく見られているのはロシアの番組である。ところが大会の放映権は国単位で取引されるため、ロシアの放送局はベラルーシでサッカー試合を流せないことが明らかになった。政治的な運動のあまり盛り上がらない近年のベラルーシだが、このときは珍しく試合鑑賞を要求するサッカーファンがデモ行進を行ったほどである。結局、国営テレビが放映権を入手するが、その際の条件は自国語で放送を行うことだった。ところどころサッカーの知識があつて、それをベラルーシ語で伝える語学力のあるアナウンサーがそのとき一人しかいなかったのである。そのためベラルーシ語を話しているつもりが翌日の新聞で文法の誤りを次々に指摘されたり、逆に間違いを恐れて「パス」とか「ゴール」以外に余計なことをほとんど喋らないアナウンサーが続出する珍妙な事態となった。日本

⁵ 服部倫卓『不思議の国ベラルーシ』岩波書店、123-158頁。ベラルーシの国民形成の問題全般を広く論じた画期的な研究書であり、本論も多くの点で同書に負うところが大きい。

対ロシアでは多くのベラルーシ人がロシアを応援して盛り上がったが、国営テレビに招かれたゲストが最初は喜んでロシア語で喋っていたのにも関わらず、おそらくクレームが入ったらしく途中からほとんど口を挟まなくなっていた。新聞や書籍などの出版物ではベラルーシ語もそれなりの存在感を保っているが、話し言葉としては危機的状態にあると言ってよい。

受難・寛容・曖昧（トゥテイシヤ）

このようなベラルーシの国民性を論じる際によく耳にするのが、受難の国・寛容な国・曖昧な国という三つの性格付けである。前述したようにベラルーシの歴史は他国による侵略と支配の繰り返しとして読むことができる。17世紀のモスクワ大公国・スウェーデン・ポーランド＝リトアニア連合間の戦争、1812年のナポレオンのロシア遠征、ドイツ・オーストリアとロシアが戦った第一次世界大戦、ロシア革命とソ連・ポーランド戦争、第二次世界大戦でのナチスドイツとソ連の戦争などでベラルーシの住民は甚大な被害を受けた。こうした一連の戦争におけるベラルーシ人の関わり方はいつも受動的に巻き込まれるかたちであり、民族意識に目覚めた少数のベラルーシ人グループが存在したとしても主体的なアクターとしてはほとんど影響力を持たないことが多かった。コサックの独立国家やガリシア地方のナショナリストなどが外部の勢力に対して一定の抵抗力を持ってきたウクライナとは大きく異なる点である。1986年のチェルノブイリ原発事故も隣国ウクライナで発生したにも関わらず、風向きなどが影響した結果、ベラルーシの国土が多量の放射能に汚染されることとなった。災難は常に外部からやってくるものとされ、受難の国ベラルーシというイメージが生まれる。

他国の侵略を受け続けてきた受難の国という歴史観と密接に関係していると思われるが、ベラルーシ人には民族や宗教に寛容なメンタリティがあるといわれている。ロシア語の「チェルペリーヴィ（忍耐強い）」やベラルーシ語の「パミヤルコーウヌイ（従順な）」という形容詞がベラルーシ人の性格付けとしてよく使われる。旧ソ連構成共和国の中で民族紛争（とりわけロシア人排斥運動）が起きなかった唯一の国だというのはベラルーシ人がしばしば誇らしげに口にする言説である。他の東欧地域と同様にベラルーシは中世の時代から都市部を中心に多数のユダヤ人が居住していたが、19世紀末から激化するポグロム（集団虐殺）もまたベラルーシの地には広まらなかった。これには様々な理由が考えられており、ロシア帝国西部のユダヤ人定住地域（リトアニア・ベラルーシ・ウクライナ）内部でのユダヤ人の社会的・経済的地位の違いによって説明を試みることもできるであろう⁶、ベラルーシ人の民族運動がウクライナなどと比べて穏健なものに留まったことも影響しただろう。実際、正教徒のロシア人とカトリックのポーランド人が支配階層にあり、ユダヤ人、タタ

⁶ 中谷昌弘「19世紀末における帝政ロシアのユダヤ人社会—1897年センサスにみるユダヤ人の職業構成—」『新潟大学言語文化研究』第9号、2003年、121-132頁。

ール人イスラム教徒、ロシア正教古儀式派、ジプシーなどの多様な社会集団が混住していた中で、人口の多数を占めるベラルーシ人の民族的覚醒が遅れたこと、今もなお曖昧な状態に留まっていることが寛容の国ベラルーシの条件を作り出したように思われる。我慢強く寛容なベラルーシ人のステレオタイプをからかう小話をひとつ紹介しておこう。

ロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人をそれぞれ釘の突き出た椅子に座らせる実験が行われた。ロシア人は怒って椅子を蹴飛ばして、出て行ってしまった。ウクライナ人もびっくりして飛び上がったが、こっそり釘を抜いてポケットに入れた。ベラルーシ人も座ってから腰を浮かせたが、「必要ならばしかたない」と言ってまた座った⁷。

ベラルーシ人の他者への寛容さは自己のアイデンティティの曖昧さと結びついている。自分たちがベラルーシ人であるというはっきりした意識がないことを揶揄する表現として「地元の人、土地の人」を意味する「トゥテイシヤ」という言葉がある。ロシア革命前の時代、「おまえは何人なんだ」と問われた農民たちは「俺たちはトゥテイシヤだ」と答えてベラルーシ人という言葉は使わなかったとされる⁸。ベラルーシ近代文学の父とされるヤンカ・クパーラ（1882-1942）が書いた戯曲『トゥテイシヤ』（1922年）には、革命後の内戦時代にロシア（ソ連）・ドイツ・ポーランドによって順繰りに占領されたベラルーシの首都ミンスクを舞台にして、運命に翻弄されるベラルーシの人々が描かれる。主人公のミキータ・ズノーサクはその時々の支配者に追従し、政治的信条や社会的アイデンティティを節操もなく取り替えてしまう。名前ですらロシア風のニキーチイ・ズノシーロフやポーランド風のニキーチシュ・ズノシロフスキへと自在に変化する。クパーラの『トゥテイシヤ』はベラルーシ人の民族意識の曖昧さを嘆いて風刺した作品だが、民族主義的の偏向が見られるとしてソ連時代は日の目を見なかった。

このように人々の自己アイデンティティが狭い農民の地域共同体や貴族や聖職者などの社会的身分に限定され、広く国家や民族に同定されることがないのは、近代的な国民国家が形成される以前の社会であれば不思議なことではない⁹。「土地の人」という自己規定はベラルーシと同じように独立国家の歴史を持たなかった19世紀のエストニア農民の間でも見られた¹⁰。しかしベラルーシの特異な点は、「トゥテイシヤ」という否定的アイデンティティを現代に至るまで引きずっていることにある。クパーラの戯曲は今もアクチュアルな意義を失っていない。独立後のベラルーシでは愛国心を高揚させる作品として多くの観衆を動員した一方で、民族主義に対して抑圧的なルカシェンコ政権下では再び上演されなくなっ

⁷ Иосиф Раскин, Энциклопедия хулиганствующего ортодокса, М.: Стоок, 2001, С.74.

⁸ Nicholas P. Vakar, *Belorussia: The Making of A Nation* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1956), p.74.

⁹ アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年、14-31頁。

¹⁰ Toivo U. Raun, *Estonia and The Estonians* (Stanford: Hoover Institution Press, 2001, Updated Second Edition), p.56.

てきている。「トゥテイシヤ」という言葉はロシア文化に席卷された感のある現代のベラルーシ人を自嘲気味に揶揄するのにも使われる一方、ポーランド占領下のベラルーシを舞台にしたロックアルバム『国民のアルバム』(2000年)のように、曖昧なアイデンティティをむしろベラルーシ的な国民性であるとして積極的に評価する傾向も最近では見られる¹¹。このように受難の国・寛容の国・曖昧な国という三つの要素が密接にからみあってベラルーシの歴史と現在の姿を形作っている。

戦争の記憶

ベラルーシ人の国民形成が遅ればせながらも一定の成果を得たのはソ連時代だった。1920年代にはソ連各地の民族に対して行われたのと同様に、ベラルーシ文化の積極的な振興政策が取られ、数多くの芸術家や歴史家を輩出する。スターリンが権力を握った1930年代には民族派知識人の多くが粛清で姿を消すが、その遺産は現代のベラルーシでもルカシェンコ大統領の親ロシア政策に反対する文化人を中心に受け継がれている。しかしベラルーシ人がひとつながりの国民としての一体感を達成したのはむしろナチスドイツとの戦争の記憶に拠るところが大きい。

1941年に独ソ戦争が始まるとすぐにベラルーシはドイツ軍の支配下に陥ったが、数万から数十万人にのぼるベラルーシ人が非正規部隊(パルチザン)を結成してナチスの占領軍と戦ったとされる。これが果たして民衆の自発的な戦いだったといえるかどうかには疑問を投げかける声もあるし、ナチス側に加担したベラルーシ人が多くいたことも指摘されている¹²。しかし多くのベラルーシ人が記憶する戦争は全国民が団結して闘い抜いたというものであり、戦後の社会でパルチザンは英雄として崇敬の対象となった。少年時代にパルチザン闘争に参加したアレシ・アダモヴィチ(1927-1994)はその体験をもとに創作活動に入り、ベラルーシを代表する戦争小説作家となった。映画化もされた処女作『屋根の下の戦争』(1960年)には、ドイツ軍占領下にあってパルチザンを密かに支援する農村の人間模様が描かれている。70年代のベラルーシ共産党第一書記ピョートル・マシエロフ(1918-1980)は今でも大衆的人気を保っているが、それは彼の名前が比較的安定したソ連時代へのノスタルジーを呼び覚ますという理由や1980年に交通事故で不慮の死を遂げたことの他に、マシエロフがパルチザン指導者の一人だった事実も大きいだろう。各地でパルチザン戦を体験した老人たちは、ベラルーシ人の英雄的戦いの生き証人として地元の名士として扱われることが多い。

パルチザンの華々しい英雄的活躍の裏側でベラルーシ住民が戦争で受けた未曾有の被害についてもよく記憶されている。戦前のベラルーシ領内には920万人が居住しており、ドイ

¹¹ 越野剛「ベラルーシの曖昧な自己意識と曖昧な他者意識：ヤンカ・クパーラの戯曲『Тутэйшыя』をめぐって」『SLAVIANA』第19号、2004年、8-20頁。

¹² Зенькович Н.А. Чья Белоруссия? М.:МК-Периодика, 2002. С.247-267.

ソ占領が原因で死んだ人間は 220 万人と見積もられているため、一般に人口の 4 分の 1 が戦争で失われたと語られることが多い。とりわけベラルーシにおけるナチスの蛮行の象徴となったのが 1943 年 3 月 22 日に起きたミンスク州ハトゥイニ村の虐殺事件である。このときドイツ軍の懲罰部隊が不意に村に現れ、パルチザンに協力したとして 149 人の住民を小屋ごと焼き殺した。戦時中には数千の村がドイツ軍によって何らかの損害を被り、ハトゥイニのように住民ごと焼き尽くされた村も他に数多い。戦後 1969 年には村のあった場所に独ソ戦争の受難を追悼するための記念公園が建てられた。焼かれた家屋のひとつひとつが記念碑となり、ベラルーシ人の 4 人に 1 人が殺されたとされる戦争の惨禍を示して 3 本の白樺が植えられ、4 本目の白樺の代わりに「永遠の火」が設置された¹³。作家アレシ・アダモヴィチはこの事件を題材にして小説『ハトゥイニ物語』（1972 年）を書き、『行け、そして見よ』（1985 年、邦題『炎 628』）というタイトルでエレム・クリモフ監督によって映画化された。ドイツ軍との英雄的な戦いに憧れてパルチザン部隊に入った少年が家族を皆殺しにされ、さらにたまたま訪れた村では住民が生きのまま焼き殺されるのを目撃する。ラストシーンで過酷な体験の末に老人のような顔に変貌する主人公の表情が印象的である。今日でもハトゥイニ公園はベラルーシを訪れた観光客・政治家・外交官などが絶えず訪れる場所になっている。

多大な犠牲を払って勝利した独ソ戦争をロシア人は大祖国戦争と呼んでその記憶に特別な敬意を払っているが、それはベラルーシ人も共有するところである。英雄的でもあり悲劇的でもある戦争の体験を共有することでベラルーシ人は国民的な一体感を得ることができたが、それは同時にソヴィエト連邦市民の共通体験でもあり、「ソヴィエト人」としてのアイデンティティを涵養するものだった。ソ連の戦争小説や戦争映画の多くが激しい戦場となったベラルーシを舞台にしていたし、アレシ・アダモヴィチやヴァシリ・ブイカウ（ブイコフ）などのベラルーシ人作家も優れた戦争小説を書いてソ連邦全土で読まれることになる。現代のベラルーシの子供の遊びの中にさえ戦争の記憶の反映を見ることができる¹⁴。ハトゥイニ村の事件とは全く対照的なかたちで歴史を記憶する場として、クロパティの遺骨問題を挙げるができる¹⁵。ペレストロイカ期に暴露されたスターリンによる民族弾圧の事実は各地で反ロシア的なナショナリズムの覚醒を促したが、ベラルーシにもそのような契機がなかったわけではない。クロパティはミンスク市郊外にある森に囲まれた地区で、1937-1941 年ごろにソ連の秘密警察によって数万人の住民が射殺されて埋められたとされる。とりわけ 1939 年にポーランドからソ連に併合された西ベラルーシから連行されてきた人々が犠牲になったと考えられている。1988 年に歴史学者ジャノン・パズニャクが埋められた遺骨の存在を公表してから広く知られるようになった。クロパティ地区には主として野党

¹³ <http://www.khatyn.by/ru> (ハトゥイニ記念公園公式サイト)

¹⁴ 越野剛「戦争と原発事故とベラルーシ人の日常生活」『スラブ研究センターニュース』第 101 号、2005 年 (<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/news/101/news101-essay1.html>)

¹⁵ David R. Marples, “Kuropaty: The Investigation of a Stalinist Historical Controversy,” *Slavic Review* 53-2, 1994.

勢力によって死者を追悼する十字架や記念碑が建てられ、ロシアによるベラルーシ支配を批判する象徴的な場所となっている。パズニャクはクロパティ問題をきっかけにして民族派の野党組織「ベラルーシ人民戦線」のリーダーとなり、1992年のベラルーシ独立に向けて活発な運動を行うことになる。一方でクロパティの遺骨はナチスドイツによって殺された人々のものだという正反対の主張もあり、ベラルーシ政府も基本的にこちらの見解を取っている。いずれにせよクロパティ地区で殺された人々がいたことには間違いなく、粛清と戦争の時代に起きた出来事がどのような由来のものであったかによって、ベラルーシに対するロシアの歴史的な位置付けが変わるだけのインパクトのある問題と思われる。

チェルノブイリの受容と記憶

1986年4月26日未明、ウクライナ北部にあるチェルノブイリ原子力発電所の4号炉で非常用の電源テストの実施中に、出力が急上昇する暴走事故が発生して原子炉が爆発、大量の放射性物質を放出した。原発から半径30キロメートル周辺は居住禁止地域（ゾーン）に指定され、住民14万人が強制移住させられて無人の地となった。ベラルーシ・ウクライナ・ロシアの三国にそれぞれ汚染地域が存在するが、とりわけ高濃度の放射能汚染を被ったのはベラルーシである。約200万人が今も汚染地域で生活しているとされ、他の二国に比べて人口的にも領土的にも小さいベラルーシにとって放射能被害の重荷は深刻なものとなっている。チェルノブイリ事故はソ連のゴルバチョフ政権を情報公開（グラスノスチ）などの改革路線にむけて踏み切らせた一方で、ウクライナやベラルーシではソ連からの自主独立を求める運動のきっかけとなった。

チェルノブイリ事故は、自分たちの住んでいた土地が目に見えない放射能のせいで半永久的に住めなくなるという人類の歴史に前例のないような状況を作り出した。未曾有の惨事を人々はどのように理解し、どのように記憶したのかをここでは考えてみたい。その手がかりとしてSF、笑い、予言、戦争の四つの側面を取り上げる。

(1) SF的想像力とチェルノブイリ事故

一般に人間は未知の事象を未知のものとしてそのまま受容することはできず、必ず何か似たものを探して類推する傾向がある。チェルノブイリ事故とその影響が明らかになるにつれて多くの人が思い浮かべたのが、アンドレイ・タルコフスキー監督の映画『ストーカー』（1979年）とSF作家ストルガツキー兄弟が書いたその原作小説『路傍のピクニック』（1972年、邦題は『ストーカー』）だった。例えば、事故の直後にチェルノブイリ原発に向かったある陸軍将校が現地に着いてすぐにタルコフスキーの映画を思い浮かべたと証言している¹⁶。

¹⁶ ユーリー・シチェルバク著、松岡信夫訳『続・チェルノブイリからの証言』技術と人間、

『ストーカー』の舞台となるのは宇宙人が地球に残していったと見られる跡地で、そこでは人間の知識では説明のつかないような不可解な出来事が起きる。何も変わったところのない普通の野原に目には見えない危険が隠されており、六角ボルトを放り投げながら慎重に進むストーカー（非合法の案内人）の姿は、チェルノブイリ事故の汚染地域に潜入して建築資材などを盗み出す「マロジョール」（もとは戦場泥棒の意味）を彷彿させる。偶然とはいえ『ストーカー』の宇宙人の跡地も放射能事故の居住禁止地区も同じ「ゾーン」という名前と呼ばれている。ストルガツキー兄弟の小説の中では「ゾーン」の他にも、宇宙人の来訪でもたらされた不可解な事物がストーカーや科学者たちによって「魔女のゼリー」「空缶」「蚊の禿」といった名前を与えられ、歪んだ言語空間が作り出されている。チェルノブイリ事故も新しい言葉の不吉な組み合わせを生み出した。第四号炉の放射能漏れを防ぐための「石棺」、汚染された建物を土に埋める「家の埋葬」、雀の涙の汚染地手当てを揶揄して言う「棺桶代」、汚染地出身の子供に対する差別語「チェルノブイリの針ねずみ」（髪の毛が抜けることを暗示）「ホタル」（放射能によって光るという連想）、事故処理に従事して被爆した「解体屋（リクヴィダートル）」、汚染地の資材を盗み出す「戦場泥棒（マロジョール）」、ゾーン内に住むことを選んだ人を指す「居残り者（サモショール）」などである。そのほかに「放射能」「ヨード」「甲状腺」「キュリー」「ベクレル」といった学術専門語が日常生活の中で頻繁に使われるようになったことも言語空間の歪みを示すといえよう。「きれいな」「きたない」という形容詞は放射能の有無をしばしば示すが、これも考えてみれば異様な状況である。汚染地域の日常風景を SF 映画『ストーカー』になぞらえる例を 2001 年 4 月 28 日の『ベラルーシ実業新聞』記事から拾ってみよう。ヴェトカ市はゴメリ州の汚染地域内にある町で、近郊には居住禁止地域が存在する。

ヴェトカの「ストーカー」たちは 4 月が来る頃を好む。自然は生氣を取り戻し、人の心も緩むからだ。それに 4 月 26 日が近づけば、外国からの訪問客が多くなる。時には 1 日に 5,6 組の訪問団が来ることもある。客人の中には、先に来た人々がゾーンの「主人」たちとの交際で好奇心を満足させ終わるまで、待つのを余儀なくされる者もある。訪問団は「人道物資」を携えて来る。たしかに、以前ほどではなく、ずっと控えめな品々ではある。たいがいは食料品の入った袋だ。客人は彼らと一緒に写真に写ることも好む。(...)「コウノトリはきれいな場所にしか住まない」、藪の茂みから不意に現われて近づいてきた男が言った。彼の名前はイヴァンといった。65 歳。この土地には昔から住んでおり、皆と一緒にここを離れるのを拒んで、「サマショール」もしくは（タルコフスキー流に）「ストーカー」のカテゴリーへ自発的に加入したわけだ。

大江健三郎は NHK スペシャル『世界はヒロシマを覚えているか』（1990 年）のための取材で SF 作家アルカージイ・ストルガツキーと対話しているが、やはり『路傍のピクニック』

1989 年、83 頁。

（『ストーカー』の原作）がチェルノブイリ原発事故の問題を先取りしたかのように見たと述べている¹⁷。ちなみに私の見たところでは、日本からベラルーシを訪れる支援団体の方々の中には、汚染された森を見て宮崎駿監督の SF アニメ『風の谷のナウシカ』を思い浮かべる人が多いようである。

(2) チェルノブイリ事故と笑いの文化

個人的自由の制限されたソ連社会で体制を揶揄するアネクドート（小話）の文化が花開いたことはよく知られている。その伝統は今も根強く生きており、チェルノブイリ事故にちなんだアネクドートも決して珍しいものではない。例えば、私が知人から聞いた笑い話には次のようなものがある。市場で婆さんがキノコを売りながら、「チェルノブイリ産のキノコだよ」と宣伝している。不思議に思った男が「そんなことを言ったら、誰もキノコを買ってくれないんじゃないか」と聞くと、婆さんは「いやいや、買って行きますよ。姑さんのためとか、職場の上司用にね」と答えた。同じ内容でも婆さんの売り物がリンゴになっているヴァリエーションもある¹⁸。

ベラルーシの作家スヴェトラーナ・アレクシエヴィチの『チェルノブイリの祈り』（1997年）は原発事故に関わった様々な階層の人の声を収集した記録文学だが、そこでもたくさんのアネクドートの例を見ることができる。例えば、汚染地に残された家畜を撃ち殺す仕事を請け負ったというハンターたちの会話の合間にはたくさんの笑い話が挟み込まれている¹⁹。次に挙げるアネクドートは、お団子が坂道を転がって行くのを見て狐や熊などの動物が次々に後を追いかけるというロシアの有名な民話のパロディになっている。「森の中をお団子が転がってきます。狐がお団子を見つけました。お団子さんよ、おまえさんどこへ転がっていきんだい？ぼくはお団子じゃないよ、チェルノブイリの針ねずみだい」。放射能を浴びた針ねずみは体毛を失ってお団子のようなになるというオチだが、先にも述べたように「チェルノブイリの針ねずみ」は汚染地の子供に対する差別語でもあるため、何とも後味の悪いアネクドートである。ハンターたち自身も汚染されたホイニキ地区に住んでいる。

ロシア民謡の一種でユーモラスな笑いの要素が強いチャストゥーシカというジャンルがあるが、やはりチェルノブイリを主題にしたものが歌われている。先ほどのハンターたちの会話にも次のようなよく知られた歌詞が出てくる。ザポロジェツはソ連時代のウクライナで生産された安価な自動車である。

ザポロジェツなんて車（マシーナ）じゃない

¹⁷ 大江健三郎『ヒロシマの「生命の木」』NHK出版（NHK ライブラリー）、1999年、62-65頁。

¹⁸ Иосиф Раскин, Энциклопедия хулиганствующего ортодокса, С.444.

¹⁹ スベトラーナ・アレクシエービッチ著、松本妙子訳『チェルノブイリの祈り』岩波書店、1998年、88-95頁。

ウクライナ人（ウクライニェツ）なんて男（ムシーナ）じゃない
もしも父親（アツォーム）になりたいなら
きんたまを鉛（スヴィンツォーム）で包めばよい

放射能を浴びたウクライナ人には男性としての生殖能力が失われているだろうというのが歌の趣旨であり、ザポロジェツとウクライニェツでうまく韻を踏んでいる。私はベラルーシ南部の汚染地域であるナロヴリャ地区出身の詩人が、「ウクライニェツ」の部分で「ナロヴリャっ子（ナロヴリャニェツ）」に変えて歌うのを聞いたことがある。

日本であれば広島や長崎の被爆者を揶揄するような笑い話は決して許容されないだろうし、ベラルーシやウクライナでも全ての人が喜んでアネクトを語るわけではない。しかし笑いのもつ豊穡な力でもってチェルノブイリ事故のような悲劇の視点をひっくり返す行為は、現実の不条理を受容するために用いられる文化的な技法だといえる。その伝統はソ連時代から現在のベラルーシにまで連続している。

(3) チェルノブイリの予言、あるいは記憶の改変

ベラルーシやウクライナではチェルノブイリ事故が起こることはすでに予言されていたと言説を耳にすることがある。「自然は生命にあふれているのに人間がそれに手を触れることはできない、そんな時が来るだろう」というような、おばあさんがむかし語って聞かせてくれた話が、いま思うと放射能による災害を予言するものだったという形式を取るものが一般的である。例えばチェルノブイリ原発で勤務していたある技師は、故郷の老人たちが「緑はあるが楽しみのない、そんな時が来るだろう」、「全てのものが揃っているが人は誰もいない、そんな時が来るだろう」という不思議な言葉を語っていたのを、原発事故が起きた後になって思い出している²⁰。

アレクシエヴィチが取材した女性ラリーサは、汚染地から疎開できないままに結婚するが、重度の身体障害を持った子供が産まれる。教会の神父から罪を悔い改めるように言われるが、自分たちが愛し合ったことの何が罪であったのかと彼女は訴えている。そこで彼女が思い出すのは祖母が語って聞かせた予言の話である。「全てが満ちあふれ、花が咲き実りをもたらす、川には魚がひしめき、森は獣でいっぱいになり、しかしそれらを人間が役立てることはできない、そんな時が地上におとずれるだろう」。ラリーサは祖母が聖書から引用してくれたとしている。しかし聖書にはこの通りの記述は存在せず、どこかで彼女の記憶に無意識の改変がなされたのではないかと思われる²¹。

子供の頃に聞いたきり忘れていた不思議な話を、自分の人生を左右するような大事件が起きた後になって思い出し、今思えば予言だったのだと気がつくというプロセスには、あ

²⁰ シチェルバク『続・チェルノブイリからの証言』、20頁。

²¹ アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』、77-80頁。

種の記憶の改変という作用が働いている。原発事故による大規模な放射能汚染という信じがたい出来事を、いくらかでも受け入れやすくするために予言を含んだ小さな物語が機能すると考えられる。「チェルノブイリ」という単語がニガヨモギを意味しており、それは聖書の黙示録の文章と一致するという事故の後に広まった噂話も、物語としてのスケールはもっと大きいと同じような役割を果たしている。シチェルバクによれば事故が起きて数日後のキエフでは、すでにニガヨモギに関する話が話題になっていたという²²。戦争小説作家アダモヴィチは黙示録の記述とチェルノブイリの災害の一致を知って世界観が変わるほどの衝撃を受けたと告白している。

チェルノブイリの「平和な原子力」が竜の牙を剥いて見せた時、ジャーナリストのおしゃべりや科学者の言い訳めいた呟きの合間に、ヨハネの預言からそのまま取られた言葉が響きわたった。「第三の御使いがラッパを吹くと、天空から大きな星が降ってきた...そして川と水源の三分の一の上に落ちた...その星の名前はニガヨモギという...」(ウクライナ語で「チェルノブイリ」はニガヨモギを意味する)。1986年の夏にある物理学者からこの話を聞いて、私の唯物論的・無神論的な知性が、説明不能なものの前に屈したのを覚えている。私はモスクワで行われた作家大会でヨハネの黙示録を引用して、公的な場で唯物論的知性を辱めることにした。会場はショックに包まれた²³。

(4)戦争の記憶とチェルノブイリ事故

ベラルーシ人にとって第二次世界大戦の記憶が重要な意味を持っている点については先に触れた通りだが、チェルノブイリ事故の体験が語られるときにもナチスドイツとの戦争が類推の対象として思い出される傾向がある。およそ1000万人のベラルーシ人のうち200万人ほどが汚染地域での居住を余儀なくされたことを独ソ戦争の死者と比べて、戦時中に人口の四分の一が失われたが、今度は五分の一が放射能の危険にさらされたという言い回しがしばしば用いられる²⁴。

アレクシエヴィチの『チェルノブイリの祈り』などは数ページめくるだけで戦争に関する記述を見つけることができる。中には原発事故についてインタビューしているのにも関わらず、延々と戦時中の思い出話を続ける老人もいて、記憶の中で二つの出来事が密接に繋がっていることがわかる。ナチスが侵略してきたときには多くの村が焼かれて消滅したけれど、戦後には疎開から帰った人々が村を再建することができた。しかしチェルノブイリの放射能汚染によって無人となった村に人々は二度と帰ることができない。このような考察が戦争体験との比較で繰り返し語られる。本橋成一監督がベラルーシの汚染地域に

²² シチェルバク『続・チェルノブイリからの証言』15-17頁。

²³ *Алесь Адамовіч, Мы – Шестидесятники*, М.:Советский писатель, 1991, С.388.

²⁴ *Чарнобыль – Погляд праз дзесяцігоддзе*, Мінск: Беларуская Энцыкладыя, 1996. С.6.

住む人々の日常生活を撮った映画『ナージャの村』(1997年)でも、立ち退きを拒否した老人がモノログの中で同じような比較をする場面がある。

レアニード・レヴァノヴィチの小説『放射能の中への帰還』(1991年)では、汚染地から移住したシチャパンとその家族が新しい土地にどうしてもなじむことができず、放射能の残る故郷の村に帰ってくる。シチャパンは板でふさがれた窓がならぶ人気のない村の通りをながめながら嘆く。「なあ兄弟、チェルノブイリはとんでもないことをしでかしたものだなあ。戦争だってこれほどじゃなかった。わしは年をくってるから覚えとるよ。あの時は食べ物みんな焼かれちゃった。カンチャンスクの側は無事だったけどな。ドイツ人どもが退却してから、隠れた森から皆が帰ってきたんだ。親戚のところまで冬を越したり、一軒家に三家族が住んだり。そのうち掘っ立て小屋が手に入った。前線から男たちが帰ってきた。それでザボリエ村は建て直された。生きてさえいればいいんだ」²⁵。作者の故郷であるモギリョフ州のクレヤヴィチ村も放射能汚染地で住民が移住を余儀なくされた。

イヴァン・シャミヤキンの『不吉な星』(1991年)はウクライナとの国境に近い地区で執行委員長をつとめるプイリチェンコとその家族の運命を通して災害の起きた時期のベラルーシを描いた長編小説である。小説は一家の次男グレブの結婚式の場面で始まるが、その翌日に発電所で事故が発生したため、原発技師のグレブは慌ただしく災害の現場に出かけてしまう。残された新妻のイリーナは連絡の絶えた夫を探しに国境を越えてチェルノブイリに向かう。途中で疎開のために無人になった村を通る場面がある。「こんなものは映画でも見たことがなかった。焼かれた村は見たことがある。人々が森へ退去したり、力づくで追い出されたりして、空っぽになった村」、「そうした村には、記録映画であれ、芸術映画の中で複製されたものであれ、戦争の跡、破壊の跡が刻まれていたものだ。ところがここでは何もかも手入れが行き届いているのに、まるで誰にも必要ではなくなったみたいなのだ」²⁶。戦争の記憶は直接それを体験した人たちの間に留まらず、戦争を描いた映画や小説を通して世代から世代へと再生産され続けることが分かる。アレクシエヴィチの本に登場するあるカメラマンは汚染地区の様子を撮影する際に、やはり自分が見たことのある戦争映画の場面を思い出している²⁷。ミハイル・カラトゾフ監督の『鶴は翔んでいく』(1957年)はソ連時代に人気のあった戦争映画である。

それから疎開です。最初に子供たちが連れて行かれました。大型バス「イカルス」に乗せられました。私は自分が戦争映画で見たのと同じように撮影していることに気がつきました。さらに気づいたのは、私だけでなく、この活動に参加している人々もまた、同じようにふるまっていることでした。人々の挙動は、我々のお気に入りの映画、覚えてますか、『鶴は翔んでいく』にあったのと同じものでした。抑えられた眼の上の涙、短い別れの言葉。

²⁵ Леанід Левановіч, Вяртанне ў радыяцыю, Мінск.: Юнацтва, 1997. С.121.

²⁶ Шамякин И.П. Злая звезда, Минск: Юнацтва, 1997. С.160.

²⁷ Алексеевич 『チェルノブイリの祈り』、101-109頁。

我々はみんな、すでになじみのある行為の形式を見つけようとしていたのです。何かにあてはめようとしていたんです。記憶に残ったことがあります。女の子が母親に手を振って、勇敢な女の子ですね、大丈夫よ、私たちは勝利するわって言うんです。

まとめ：ベラルーシの国民形成

ペレストロイカの進展はモスクワやバルト三国と比べるとベラルーシやウクライナは遅れがちだった。チェルノブイリ事故が発生して最初の数年間は情報開示が進まず、直後に住民が強制退去させられた 30 キロゾーンの外部にも汚染地帯が広がっていることは知られないままだった。そんな中で最初に声を挙げたうちの一人が戦争作家のアダモヴィチである。彼は 1980 年代の初め頃から核兵器の廃絶運動に積極的に携わるようになっており、チェルノブイリ事故が発生してからは被害者救済のため外国に支援を求め、放射能汚染の正確な情報を求めて政府の官僚的な秘密主義を激しく批判した²⁸。1989 年の第 1 回ソ連人民代議員大会で当選すると、ベラルーシの深刻な放射能汚染をゴルバチョフに向けて訴えてもいる。ペレストロイカの後期にはベラルーシ人の間にナショナリズムの気運が高まったが、その主たる契機となったのはベラルーシ語の危機的状況、クロパティの遺骨問題、そしてチェルノブイリ原発事故だった²⁹。これら三つの問題はベラルーシを支配してきたソ連あるいはロシアに対するプロテストの心情を呼び起こした。とりわけ 1988 年にクロパティのスターリン犯罪を告発して有名になったジャノン・パズニャクが率いるベラルーシ人民戦線（1989 年設立）はナショナリズム運動の司令塔の役割を果たすようになった。

しかしベラルーシが実際に独立を果たしてしまうと、激しいナショナリズムは失速する。ロシア語とロシア文化に慣れ親しんだ大半のベラルーシ人は人民戦線が主張するような 180 度の方向転換にはついていくことができなかった。社会的経済的な混乱も独立したばかりの国家の将来に対する不安をかきたてた。そうしたなかで安定したソ連時代へのノスタルジーが人々の心情を支配するようになる。チェルノブイリ事故の悲劇はクロパティの死者たちよりもむしろ独ソ戦争の受難という伝統的イメージと響きあうようになる。1994 年にはロシアとの統合路線を主張するアレクサンドル・ルカシェンコが最初の大統領選挙で勝利した。ルカシェンコが 2001 年に独ソ戦争の戦勝記念日に行った演説を見てみよう。

大祖国戦争はベラルーシに甚大な被害をもたらしたため、共和国は新たに再建しなおさねばならぬほどだったのであります。人口数が回復するのに半世紀あまりも必要でした。

しかしそこで新たな戦争、新たな悲劇が我々を襲いました。その名前はチェルノブ

²⁸ 越野剛「核時代の文学：アレシ・アダモヴィチと大江健三郎」『スラヴ学論叢』第 6 号、2003 年、88-96 頁。

²⁹ Michael Urban and Jan Zaprudnik, “Belarus: from statehood to empire?,” in Ian Bremmer and Ray Taras (ed.), *New States, New Politics: Building the Post-Soviet Nations* (Cambridge UP, 1997), pp.286-290.

イリであります。テクノロジーに起因したこの惨事の打撃は、ベラルーシ国民にとって第二次世界大戦の破壊的結果と等しいものです。恐るべきチェルノブイリ事故の物質的損害は数字で表すこともできそうですが、人々の健康を金銭で計算することはできません。国民の五人に一人が危険の下に置かれているのであります³⁰。

チェルノブイリ事故が第二の独ソ戦争にたとえられているうえに、演説の続きではソ連の崩壊が第三の戦争、独裁的なルカシェンコ政権を打倒しようとする欧米の陰謀が第四の戦争だとされている。2001年の2回目の大統領選挙を意識したプロパガンダ的な演説ではあるが、現在のベラルーシ国民の多くが抱くソ連ノスタルジーを投影したものになっている。ベラルーシ人の国民意識は、第二次世界大戦やチェルノブイリ事故といった悲劇の体験を共同の記憶とすることによって形成されてきた。その連帯の感覚はベラルーシ人という自己意識に留まらず、ソヴィエト人という大きな枠組みにも馴染むものだった。チェルノブイリの悲劇をクロパティに象徴されるソ連の圧制の記憶に結びつける試みは今のところ国民の広い認知を受けていない。ルカシェンコの統治するベラルーシはロシアとの間に「連合国家」という中途半端な距離を保ちながら、そのアイデンティティを曖昧にしたまま迷走している。ベラルーシは近代的な国民国家を建設することには失敗したと見えるかもしれない。しかし排他的なナショナリズムが横行する現代世界において、曖昧で寛容な国民性を形成してきたベラルーシは、国家と民族のあり方を考える上で興味深い例となりえる。東西の狭間にぽっかりと空いた白い空虚のようなベラルーシだが、そこには受難の歴史と融通無碍でしぶとい人々の姿を見ることができる。

³⁰ Советская Белоруссия, №125, 11 мая 2001